

なぜドラクロワとバルザックは 動物に関心を示したのか

—félin ネコ科の猛獣をめぐる—

沖久 真鈴

1. 動物の19世紀

フランスにおいて19世紀前半ほど動物に関心が向けられ、動物が研究対象となった時代はないのではないだろうか。18世紀の後半に博物学者ビュフォンが、『博物誌』においてあらゆる動物種を描き分類したが、実際に人々が動物を身近に感じる事が出来るようになったのは、19世紀になってからであろう。きっかけは、1789年のフランス革命である。ヴェルサイユ宮で飼われていた王の動物たちが民衆の手に渡り、ジャルダン・デ・プラント Jardin des Plantes 国立自然史博物館で公開展示されるようになった。これが動物園の誕生であり、人々が柵越しに動物を観察できるようになった。さらに1798年ナポレオンのエジプト遠征の際には、大勢の学者が同行しフランスには生息しない動物を記録し、本国に持ち帰った。このとき、ジャルダン・デ・プラントの初代館長で博物学者のエティエンヌ・ジョフロワ・サンティレール Etienne Geoffroy Saint-Hilaire (1772-1884) も同行し、動物園はさらに拡大発展した。動物の解剖学的研究も進み、1830年には科学アカデミーにおいてジョフロワ・サンティレールが生物における「器官形成の統一性」の原理を説き、博物学者のジョルジュ・キュビエ Georges Léopold Chrétien Frédéric Dagobert Cuvier (1769-1832) がそれに反論し大論争となった。また19世紀前半はさまざまな政治変動があり、パリが大きく変化した時代である。さまざまな地方からさまざまな階級が集まったことでパリは巨大化した。人や金の出所が曖昧になり、方言が会話の邪魔をした。そのフラストレーションを解消するために人々が求めたものは、人の外見の特徴

から内面を知ろうとする学問であった。頭蓋骨の凹凸から人の内面を知ろうとするガル Franz Joseph Gall (1758-1828) の骨相学は1818年に仏語訳され大流行し、顔の特徴から人の内面を知ろうとするラファーター Johann Caspar Lavater (1741-1801) の観相学は1806年から1809年にかけて図解入りで仏訳され人気を博し、1820年には10巻本として再版され大成功をおさめた。さらに「生理学」と称して人々の生活や風習を分析する読み物が生まれた。このような分野においても動物が比較対象として持ち出され、人間を分類しコード化するのに役立った。

こうした時代背景の中で、特に動物に魅了された二人の人物に着目してみたい。19世紀のロマン主義画家ウージェーヌ・ドラクロワ Eugène Delacroix (1798-1863) と小説家オノレ・ド・バルザック Honoré de Balzac (1799-1850) である。ドラクロワは1828年頃からライオンやトラなどの猛獣を突如大量に描き始め、その数約400点にのぼる。動物画の歴史をみてもこれほど多く動物を、とりわけネコ科の猛獣を描いた画家はいない。一方バルザックも、「人間喜劇」の初期の作品から晩年の作品に至るまで動物の比喩を多用している。登場人物たちはあらゆる動物にたとえられ、まるで動物たちが服を着て動き回っているかのような作品すらある。ドラクロワが《砂漠に横たわるトラ》*Tigre couché dans le désert*⁽¹⁾ を描いた1830年に、作家オノレ・ド・バルザックは、『砂漠の情熱』*La passion dans le désert*⁽²⁾ という作品を発表した。偶然の一致だろうか。この作品はエジプトの砂漠で雌ヒョウと人間の兵士が心を通わす物語だ。バルザックは89篇ある人間喜劇作品の中で比喩として動物を作中に多用しているが、『砂漠の情熱』だけは、本物の動物を登場人物として扱った唯一の作品なのである。なぜドラクロワとバルザックは、1830年にともに砂漠に横たわるリアルな félin (ヒョウとトラ) を描いた＝書いたのだろうか。二人の芸術家はどのように félin に向き合い、どのように自らの作品に取り入れていったのだろうか。1830年前後の背景としての動物事情や、《砂漠に横たわるトラ》と『砂漠の情熱』との共通点を考察しながら、上記の問いに答えてみよう。

2. Félin への興味、ドラクロワの場合

まず、ドラクロワ以前にどのような動物画があるのかみてみよう。動物を比

なぜドラクロワとバルザックは動物に関心を示したのか

較的多く描いたのは、17世紀バロック期を代表するオランダの画家レンブラント Rembrandt Harmenszoon van Rijn (1606-1669) だ。ライオンを12点余り描いている。ライオンはオランダ共和国のシンボルとして、また苛烈で攻撃的な性格から「正統派キリスト教の獅子」と呼ばれた聖ヒエロニムスのモチーフとして描かれた。18世紀にはイギリスのジョージ・スタップス George Stubbs (1724-1806) が当時イギリスで人気のあった競馬や狩猟などを主題に馬を多く描いた。自らも馬の解剖を行い、貴族の依頼で馬の「肖像画」的な絵を、正確さをもって描いた。また馬とライオンの劇的なテーマの作品を20点近く描いている。彼に影響を受けたのが19世紀、フランスロマン主義絵画の先駆者であるジェリコー Théodore Géricault (1791-1824) とドラクロワである。ジェリコーは馬の習作を数多く描いている。ヴェルサイユ宮の帝室厩舎に通って描き、馬一頭一頭の特徴を繊細に描き分けた。しかし同時に馬が脚を前後に大きく伸ばした現実にはあり得ない姿で走る絵も描いている。これはイギリスで流行していた「スポーティング・プリント」と呼ばれる大衆版画との類似が指摘されており、ジェリコーは大いに参考にしたと推測される。それまでフランスにはイギリスのような馬の肖像の伝統は存在しなかったが、18世紀後半イギリス趣味が導入され、流行版画的構図と、写実性の両方が受け継がれた。この流れを受け出てきたのがドラクロワだ。馬も多く描いたが、félin ネコ科の猛獣だけでも400点近く描いていることをみると、いかにこの画家が動物画の歴史的にも破格で特異な存在かということがわかる。では実際にドラクロワがどれほど félin に興味を持ち、どのように付き合っていたのかみていこう。

G・ダルジャンティ G. Dargenty によって編纂されたドラクロワ回想録の一節を見てみると、ドラクロワがどれほど熱心に動物を観察していたかが分かる。足しげくジャルダン・デ・プラントへ通い、一日中そこで過ごし特にトラやライオンが檻の中を行ったり来たりする様子を何時間も観察していたと言う。

«Il passait au Jardin des Plantes des journées entières, pendant lesquelles, observant les animaux dans toutes leurs postures, il se pénétrait de leurs mouvements, de leur galbe, cherchant la dominante de leur caractère [...]. Ce sont ces observations répétées, faites avec la sagacité, la conscience, la volonté et la suprême compréhension du génie, qui ont fait de Delacroix le premier de tous les animaliers.»

彼は何日間も、一日中、ジャルダン・デ・プラントで過ごし、その間動物たちのあらゆる姿勢を観察し、彼らの動き、曲線を自分のものにし、彼らの最も支配的特徴を探した。(…) 慧眼、熱心さ、意志、特性の最高度の理解をもって繰り返しなされた、こうした観察がドラクロワを最も優れた動物画家にした⁽³⁾。

1829年6月19日にドラクロワが友人で動物彫刻家のバリーに送った手紙には、動物園のライオンが死んだので、ジャルダン・デ・プラントへ駆けつけようという内容が見られる。

«Le lion est mort. Au galop. Le temps qu'il fait doit nous activer. Je vous y attends.»
ライオンが死んだ。大急ぎだ。天候がこうなのだから急がなければいけない。あなたをそこで待っている⁽⁴⁾。

二人でライオンの解剖に立ち会い、デッサンしたのである。バリーへの短く簡潔な文章を見ると、ドラクロワのはやる気持ちと félin への強い熱情がうかがえる。こうして解剖学的側面からも研究し、忠実なデッサンを重ねたことによってドラクロワの描く félin は称賛を得る。たとえば1831年のサロンに出展した作品《母親と戯れる子トラ》*Jeune Tigre jouant avec sa mère* について、ジャーナリストのルイ・ペス Louis Peisse は「ナショナル紙」においてこうコメントしている。

<Le National, 30 mai 1831.>

«C'est un des meilleurs morceaux de l'exposition. La tigresse est admirablement peinte ; la tête est superbe de vérité et d'expression : la pose de l'animal est rendue avec une énergie remarquable. Les plus belles nuances de la peau bandée sont exécutées de main de maître. La couleur, appliquée avec justesse et vigueur, n'est pas jetée avec la négligence que cet artiste avait mise presque à la mode. Elle n'est pas non plus fantastique, comme celle qu'il a souvent adoptée pour les chevaux ; elle est vraie, et prise sur nature. C'est une excellente étude, qui prouve que M. Delacroix pourra faire de belles choses quand il n'aura plus ses fantaisies systématiques.»

これは展示会で最も優れた作品のひとつである。雌のトラは見事に描かれている。頭は見事なまでに真実で、よく表現されている。動物の姿勢は目覚ましいエネルギーをもって描かれている。縞模様の肌のもっとも美しい色合いが巨匠の手によって実現されている。正確さと力強さのある色は、この芸術家がかつて流行させた粗雑さ

なぜドラクロワとバルザックは動物に関心を示したのか

をもっては描かれていない。色彩は馬を描くのによく用いたそのような空想的なものではない。つまり、真実であり、自然にそくしている。これは素晴らしい研究で、ドラクロワ氏がやがて体系的幻想を抱かなくなり、美しいものを制作できることを証明している⁽⁵⁾。

異国趣味、すなわち自分たちの西欧世界とは歴史も文化も違う未知の世界への憧れや幻想を特徴の一つとするのがロマン主義である。ドラクロワはロマン主義を代表する画家でありながら、彼の描く動物は自然に忠実なリアリズム絵画として評価されたといえる。ジャルダン・デ・プラントに通い実際に動物を観察したことに加え、歴史的に東方世界が身近になったことも要因のひとつであろう。1821年のギリシア独立戦争では、トルコ支配に対して立ち上がったギリシア人への同情が西欧の若者を熱狂させたし、東方世界への旅行が容易になり、ジェラルド・ド・ネルヴァル Gérard de Nerval (1808-1855) やアレクサンドル・デュマ Alexandre Dumas (1802-1870) などが実際にエジプトや小アジアを旅行して紀行文や作品の中で東方世界を取り上げた。ドラクロワも1832年モロッコを旅行した。実際の体験を通じたことで、東方世界や異国の動物たちが、単なる夢や幻想ではなく身近な生々しい関心事として捉えられていったであろうことは、ドラクロワの félin を見れば明らかだ。

また注目すべきことはドラクロワが動物を研究しながら人間とのアナロジーについても興味を持ったことだ。「フランスと外国の文学講義論評」*Revue des cours littéraires de la France et de l'étranger* にはこうある――

Il me racontait une fois ses études anatomiques. Pendant longtemps, avec le sculpteur Barye, il avait dessiné des animaux au Muséum : on leur avait donné un lion écorché qu'il éclairaient le soir avec des lampes. Delacroix l'avait dessiné dans toutes les attitudes, essayant de comprendre le jeu du moindre muscle. Ce qui l'avait le plus frappé, c'est que la patte antérieure du lion était le bras monstrueux d'un homme. Selon lui, il y a ainsi, dans toutes les formes humaines, des formes animales plus ou moins vagues qu'il s'agit de démêler, et il ajoutait qu'en poursuivant l'étude de ces analogies entre les animaux et l'homme, on arrive à découvrir dans celui-ci les instincts plus ou moins vagues par lesquels sa nature intime le rapproche de tel ou tel animal.

彼はかつて、解剖学の研究について話してくれたことがある。彼は長い間彫刻家のバリーとともに、博物館で動物のデッサンをしていた。一体のライオンの皮を剥い

だ標本が与えられ、それを夜にはランプの明かりで照らしてデッサンしていたのだ。ドラクロワはそれをあらゆる姿勢でデッサンしどんな些細な筋肉の動きをも理解しようとした。最も彼を驚かせたのは、ライオンの前脚が人間の怪物化した腕であったということだ。彼によると、人間のあらゆる形状のうちにもまた、多かれ少なかれ漠然とした動物の形状があるのであって、それを識別しなければならないし、さらに彼が言うには、動物と人間のこうしたアナロジーの研究を追求すると、人間のうちに、多かれ少なかれあいまいな本能を発見できるのであり、そうした本能によって人間の体質がしかじかの動物に、人間を近づけるのである。……⁽⁶⁾

ドラクロワは動物の身体を研究しながら、筋肉や骨格に人間との肉体的アナロジーを見出したのだ。そしてドラクロワの Félin に対する興味は、生涯通して続いた。1841年の8月には動物学者のイジドール・ジョフロワ・サンティール Isidore Geoffroy Saint-Hilaire (1805-1861) に手紙を出し、動物たちの餌の時間に間近で動物を見せてくれるよう頼んでいる。

«Je désirerais vivement obtenir la permission de faire des études d'après les animaux de la ménagerie du jardin du roi, et à cette effet d'être introduit dans l'intérieur du bâtiment où ils sont gardés, à l'heure du repas. Je vous serais bien reconnaissant si vous étiez assez bon pour m'accorder cette faveur le plus tôt possible.»

王立植物園動物園の動物たちについて、研究させていただけますよう、そしてそのために、動物たちが守られている獣舎の内部に、餌の時間に入れますよう、その許可をどうしてもいただきたく存じます。そうしたご厚意はできるかぎり早急に私に認めいただけるほど寛大なお方でありますならば、深く感謝いたしたく存じます⁽⁷⁾。

続いてドラクロワの日記⁽⁸⁾ を見てみると、体調を崩し始めた1850年代にもなお、ジャルダン・デ・プラントへ通っていたことが記されている。

<jeudi 6 juin 1850>

«Passé la journée au Jardin des Plantes. Jussieu m'a conduit partout»

ジャルダン・デ・プラントで一日をすごした。ジュッシュューは私をいたるところに導く。

<vendredi 7 mai 1852>

«J'avais fait une séance le matin au Jardin des Plantes. J'y ai fait renouveler ma carte.

なぜドラクロワとバルザックは動物に関心を示したのか

Travaillé au soleil parmi la foule, d'après les lions. En arrivant, pris, dans le jardin, de la langueur, je me suis à dormir au soleil, sur une chaises.»

ジャルダン・デ・プラントで朝のうち仕事をした。そこで私の証明書を更新した。群集のなか太陽のもと、ライオンを描いた。園についたが疲れてしまい、衰弱から私は太陽のもと椅子で寝てしまった。

<18 avril 1854>

«J'ai été au Jardin des Plantes passer une heure à voir les animaux, mais ils étaient paresseux et ne m'offraient pas grand-chose à étudier ; d'ailleurs, la chaleur était excessive.»

ジャルダン・デ・プラントに行って、動物を見るために一時間過ごした。しかし彼らは怠惰で私に研究すべきことはたいして与えてくれなかった。しかも暑さが異常だった。

生涯通して動物を研究し、これほど熱心に動物を描いた画家はドラクロワの他にいない。歴史的に動物が神話のモチーフや、象徴的な意味で、あるいは貴族趣味のために描かれてきたのに対し、ドラクロワは動物そのものと真摯に向き合った。1830年ごろには félin 単独のデッサンが多いが、以降は、他の動物や人間を襲う場面が多く描かれていく。1842年《雌ライオンに襲われる馬》*Cheval attaqué par une lionne*⁽⁹⁾、1844年の《馬を食らうライオン》*Lion dévorant un cheval*⁽¹⁰⁾、1849年の《アラブ人の胸を引き裂く雌ライオン》*Lionne déchirant la poitrine d'un arabe*⁽¹¹⁾、1853年の《猪を食うライオン》*Lion dévorant un sanglier*⁽¹²⁾ や《兎を食うライオン》*Lion dévorant un lapin*⁽¹³⁾、などだ。獲物に襲い掛かる戦いの熱っぽさ、馬の身体に食い込むライオンの鋭い爪、しとめたあとの静寂さ、獲物の温かそうな死体から流れる血などゴロテスクだが美しい。félin そのものの凶暴性や生命力がよく描き出されている。ドラクロワが félin を用いて描いた、強いものが弱いものを襲う場面は劇的であり、人間社会にも共通する。その点で小説家バルザックと類似してはいないだろうか。では次に、バルザックが félin を用いてどのように人間社会を描き出したのかみていきたい。

3. Félin への興味、バルザックの場合

バルザックの動物への関心は随所にみられる。1842年の「人間喜劇 総序」においては、ビュフォンが『博物誌』で動物を分類したように人間を分類し書き出すことが「人間喜劇」の構想であると言及しているし、ジョフロワ・サンティエールとキュビエの大論争にも触れている。『歩き方の理論』(1833)⁽¹⁴⁾は、人間の歩行の様子から内面を分析しようとした生理学のものであるが、人間を知るためにはまず動物のことを深く研究しなければならない、と言及するに至っている。とくに動物比喩が多く見られる作品『ゴリオ爺さん』(1834)⁽¹⁵⁾の献辞はジョフロワ・サンティエールに宛てられており、作中では登場人物たちが密談をする大事な場所としてジャルダン・デ・プラントが出てくる。ドラクロワが◀砂漠に横たわるトラ>を描いた1830年、バルザックは『砂漠の情熱』を描いた。これは、ナポレオンのエジプト遠征に加わったフランス人兵士が砂漠の洞穴で雌のヒョウに鉢合わせる、という物語だ。兵士は、食われるかもしれないと死の恐怖におびえながらも雌ヒョウの美しさに見とれ、人間の女性との類似を見出し、手なずけ心を通わせていく。外に広がる砂漠の景色も、動物と心を通わせるというテーマ自体も、すべてエキゾチックでロマン主義的な作品であると言える。しかし同時にバルザックはこの雌ヒョウの様子を、かなりリアルに記述している。ロマン主義的テーマかつ写実的描写という点でドラクロワと共通している。ドラクロワ同様、バルザックもジャルダン・デ・プラントに通い実物をよく観察したにちがいない。いや、そうでなければこれほどまでの描写はできないであろう。たとえば、洞穴の暗がりではじめて獣の存在に気付いた時の様子を見てみよう――

3-1.

Il se dressa sur son séant, et le silence profond qui régnait lui permit de reconnaître l'accent alternatif d'une respiration dont la sauvage énergie ne pouvait appartenir à une créature humaine.

半身を起こすと、辺りを支配していた静寂のおかげで吸ったり吐いたりする音が聞こえたが、その野生的なエネルギーは人間のものであるはずがなかった⁽¹⁶⁾。

何がいるのか見えない中で、動物の呼吸音に注目している。さらに、匂いにも触れている。

3-2.

Une odeur aussi forte que celle exhalée par les renards, mais plus pénétrante, plus grave pour ainsi dire, remplissait la grotte.

狐が放つものと同じくらい強烈なおい、いや、それ以上にきつく、いうなればもっとずっしりとくる匂いが穴の中にみなぎっていた。

このような描写からバルザックが動物園の檻の前でヒヨウの寝息を聞いたり、獣舎に満ちる匂いにむせかえりながら観察していた様子が想像できる。兵士の目が暗闇に慣れてきて、相手が雌のヒヨウであることを確認したあとの描写はこうだ——

3-3.

La fourrure du ventre et des cuisses étincelait de blancheur. Plusieurs petites taches, semblables à du velours, formaient de jolis bracelets autour des pattes. La queue musculieuse était également blanche, mais terminée par des anneaux noirs. Le dessus doux, portait ces mouchetures caractéristiques, nuancées en force de roses qui servent à distinguer les panthères des autres espèces de *felis*.

腹部と腿の毛並みは輝くばかりに白かった。ビロードと見紛いそうな小さな斑紋が足にきれいな飾り輪をいくつも描き出していた。筋肉の発達した尾もおなじように白かったが、先には黒い輪の模様がいくつもついていた。背中毛並みはくすんだ金のような黄色だが、いかにもつやつやで柔らかく、ヒヨウをほかのネコ科の動物から区別するのに役立つ、濃淡のあるバラの花柄という、あの特徴的な斑紋がいくつもついていた⁽¹⁷⁾。

まるで動物図鑑を読んでいるかのような博物学的で忠実な毛の描写である。ヒヨウの模様はチーター、ジャガーと似ており見分けが難しい。チーターは黒塗りの斑点、ヒヨウは花のような輪っか部分だけが黒い。ジャガーはその輪っかの中にさらに黒い斑点がついている。バルザックはヒヨウの模様を正確に描写するだけでなく、他の *félin* との違いを明らかに示そうとしているのだ。さらに博物学的なヒヨウの描写を見てみよう——

3-4.

Enfin, elle bâilla, montrant ainsi l'épouvantable appareil de ses dents et sa langue fourchue, aussi dure qu'une râpe.

最後にあくびをすると、おそろしい歯の仕掛けと、おろし金と同じ位硬く、真ん中に深く筋の入った舌が見えた⁽¹⁸⁾。

3-5.

[...] elle avait trois pieds de hauteur et quatre pieds de longueur, sans y comprendre la queue. Cette arme puissantes, ronde comme un gourdin, était haute de près de trois pieds. La tête, aussi grosse que celle d'une lionne, se distinguait par une rare expression de finesse ; la froide cruauté des tigres y dominait bien.

体高は3ピエ (97.2 cm)、体長は尾を入れずに4ピエ (129.6 cm) あったからこの種のものでは間違いなくもっとも見事な個体のひとつだった。こん棒のように丸くて強力な武器となる尾は3ピエもあった。頭は雌ライオンなみの大きさだが、わずかばかり繊細な表情のあるところが違っていた。トラのような酷薄な残忍さはなるほど、際立っていた⁽¹⁹⁾。

3-6.

Il monta sur la colline, et dans le lointain, il l'aperçut accourant par bonds, suivant l'habitude de ces animaux auxquels la course est interdite par l'extrême flexibilité de leur colonne vertébrale.

丘に登ると遠くのほうから、脊柱が極度にしなやかなために走ることができないこの種の動物の習性通り、飛び跳ねながらやってくるのが目に入った⁽²⁰⁾。

以上のように実物に忠実な描写が目立ち、ドラクロワ同様 félin という動物そのものに対する研究がうかがえる。また、バルザックも動物と人間のアナロジーに興味をもっていた。この雌ヒヨウの身体の曲線美や、優雅さ、媚びるしぐさ、愛くるしさは人間の女性のイメージに重ねられ、兵士によってかつての恋人をそう呼んでいたようにミニオンヌと名付けられる。雌ヒヨウは兵士が自分のそばから離れると嫉妬のうなりを上げ、兵士は「ヴィルジニーの心があの中の中に乗り移ったみたいだ、きっとそうだ…！」と、雌ヒヨウの中にかつての恋人の精神を見出す。このことによって、獣と人間の心の交流を描いたのであり、バルザックは Félin の身体づくりや行動にだけでなく精神にも人間とのアナロジーを見出したのだ。これが、バルザックの特異な点であり、その後の「人間喜劇」作品の中で、動物の比喩というかたちで発展していく。動物比喩は単に見ただけでなく精神性にも用いられる。バルザックは動物を用いて人間を描く、という方向へ進んでいったのであり『砂漠の情熱』以降、動物そのものは、もはやペットや馬車馬として出て来るのみ、重要な役は与えられない。

では、そのバルザックの félin は「人間喜劇」のなかでどのように見られるだ

なぜドラクロワとバルザックは動物に関心を示したのか

ろう。どのような登場人物に使われ、どのようなイメージが付与されているのか。横断的に見てみよう。

4. 「人間喜劇」において Félin にたとえられる登場人物たち

まずはライオンにたとえられる登場人物をあげいく。ライオンにたとえられるのは圧倒的に男性たちが多い。

1) 『金色の眼の娘』の主人公アンリ・ド・マルセー

Sous cette fraîcheur de vie, et malgré l'eau limpide de ses yeux, Henri avait un courage de lion, une adresse de singe.

アンリは、生命にあふれた若々しさと、水のように澄んだ眼の背後に、ライオンのような勇気と猿のような巧妙さを持っていた⁽²¹⁾。

容姿端麗でどんな女性をもふり向かせられる自信に満ちた彼のプライドの高さや誇り高さといった精神性が作中でしばしばライオンにたとえられる。

2) 『ランジェ侯爵夫人』のモンリヴォー將軍

Sa tête, grosse et carrée, avait pour principal trait caractéristique une énorme et abondante chevelure noire qui lui enveloppait la figure de manière à rappeler parfaitement le général Kléber auquel il ressemblait par la vigueur de son front, par la coupe de son visage, par l'audace tranquille des yeux, et par l'espèce de fougue qu'exprimaient ses traits saillants. Il était petit, large de buste, musculeux comme un lion. Quand il marchait, sa pose, sa démarche, le moindre geste trahissait et je ne sais quelle sécurité de force qui imposait, et quelque chose de despotique.

彼の大きい頑丈な頭のおもに目立った特徴は、ふさふさとした、黒いゆたかな髪の毛であった。これがまるでクレベール將軍を彷彿とさせるように、顔の周りを取り囲んでいたが、その精神的な額、横顔、落ち着き払った大胆な目つき、なんとなく狂暴にみえる激しい顔つきなどまでが、この將軍にそっくりであった。彼は小柄であったが、上半身が大きく、まるでライオンのように筋肉質であった。彼が歩いているときには、姿勢にも足取りにもちょっとした身振りまでに、なんとなく人を威嚇するようなゆるぎない力と何かしら高圧的なものが現れていた⁽²²⁾。

モンリヴォー将軍はアフリカ探検やワテルローの戦いなど、数々の危険を潜り抜けてきた無口で強靱な男性である。これは、外見的、肉体的特徴がライオンに例えられているものだ。大きい顔を取り囲む、ふさふさとした髪はライオンの鬣を想起させるし、大きな上半身、は雄ライオンによく使われる表現であり、歩き方、身振りなど行動様式もライオンと重ねられている。ライオンの外見そのものを持ちながら、しかしそれによって、モンリヴォーの揺るぎない強さや、威厳といった精神性を読者に印象付けることに役立っている。

3) 『従妹ベット』のヴァンセスラス・シタインボック

[...] il offrait dans les yeux, comme ces lions encag  au Jardin des Plantes, le d sert que sa protectrice faisait en son  me.

ジャルダン・デ・プラントの檻に入れられたライオンのように、庇護者が彼の魂のなかに作りだした砂漠を目の色に映し出していた⁽²³⁾。

これは、本来ポーランドの貴族であるシタインボックがバりに亡命し将来を悲観したあげく自殺未遂したところを老嬢ベットに庇護されている描写である。誇り高さが失われ、自由を奪われた精神的な閉塞感を檻の中のライオンをつかって表現している。

4) 『従妹ベット』の老嬢ベット

Apr s avoir commenc , disait-elle, la vie en vraie ch vre affam e, je la finis en lionne. 初めは飢えたヤギだったけれど、終わりは雌ライオンになれそうね。と彼女は言った⁽²⁴⁾。

これはもっぱら男性登場人物に使われるライオンのたとえば、女性に使われている例である。ユロ家の小間使いのように扱われ、男性的な気質と頑固さを持つことから雌ヤギとあだ名が付けられたベットが、庇護していたヴァンセスラス・シタインボックをユロ家の娘に横取りされたことによって復讐の化身となったあとの場面である。復讐の一つとしてユロ元帥との結婚を目前にし権力を獲得している。捕食される側から、百獣の王ライオンへの出世が鮮やかに読者に印象付けられる。また結婚を意識し、コルセットやショールを身に着け、髪や靴にまで気を遣うようになった様子が、「コケットリーな女性」を表す19世

紀に流行した言葉 «lionne» で表現されている。

5) 『ゴリオ爺さん』のヴォートラン

Il bondit sur lui-même par un mouvement empreint d'une si féroce énergie, il rugit si bien qu'il arracha des cris de terreur à tous les pensionnaires. A ce geste de lion, et s'appuyant de la clameur générale, les agents tirèrent leurs pistolets.

思わず飛び上がったその勢いには、あまりにも凶暴なエネルギーがみなぎり、あまりにもものすごい声で吠えたてたので、下宿人たちはそろって恐怖の叫びをあげた。ライオンのようなその動作を見、みんなの叫び声に勢いづけられて、警官たちはポケットからピストルを取り出した⁽²⁵⁾。

ヴォケー館に身を隠していた脱獄囚ヴォートランが、警察にふみこまれ逮捕される場面である。「跳ねる」「凶暴な」「吠える」という語によってライオンの行動と重ねられている。まるで驚いたライオンそのものを見ているかのような描写だ。1834年の『ゴリオ爺さん』に出てくる動物のたとえば、以降の他の作品よりもより、動物の習性や行動様式、鳴き声などが色濃く重ねられている印象がある。

以上のようにライオンのたとえば、勇気、誇り高さ、社会的地位や権力、といったイメージで使われており、男性、または男性的気質の女性に用いられる。では次にトラが用いられている例をあげていく。

6) 『従妹ベット』のサンステーフ夫人

Cette vieille sinistre offrait dans ses petits yeux clairs la cupidité sanguinaire des tigre. Son nez épaté, dont les narines agrandies en trous ovales soufflaient le feu de l'enfer, rappelait le bec des plus mauvais oiseaux de proie.

この不吉な老婆の薄茶色の小さな目には、血に飢えたトラの貪欲さが現れていた。ひしゃげた獅子鼻は、最も手ごわい猛禽類のくちばしを思わせ、鼻孔は火を吐く地獄の大きな穴のようだった⁽²⁶⁾。

サンステーフ夫人は雇われの殺し屋であり、ユロ家復讐をもくろむヴァレリーを死に至らしめる人物だ。死の臭いがする、手段を択ばない残忍な人柄がトラにたとえられている。

7) 『従妹ベット』の老嬢ベット

Mm Marneffe s'arrêta dans cette œuvre de *picador*, la cousine Bette l'effraya. La physionomie de la Lorraine était devenue terrible. Ses yeux noirs et pénétrants avaient la fixité de ceux des tigres. Sa figure ressemblait à celles que nous supposons aux pythonisses, elle serrait ses dents pour les empêcher de claquer, et une affreuse convulsion faisait trembler ses membres.

マルネフ夫人は、牛をじらす闘牛士の役を途中でやめた。ベットが怖くなったのだローレーヌ女は恐ろしい顔をしていた。射るような黒い目はトラの目のように座って睨みつけている。その形相のすさまじさはギリシアの巫女の形相かとおもうほどで、ガチガチいわないように歯を食いしばり、ものすごい痙攣で手足がぶるぶる震えている⁽²⁷⁾。

ベットが、庇護していたヴァンセスラス・シタインボックの裏切りを知り、我を忘れて激昂する場面である。このあとユロー家を粉々にしてやると復讐を誓う。理性を失い危害を加える状態になったことがトラで表現されている。ユロー家は、ベットのことを「頑固な雌ヤギ」であると思っているため、危険なトラにベットが変化したことに気付かない。登場人物が思う相手の性質と、作者が与えた本性は、動物比喩のずれとして表わされ、その後の物語展開を面白くしていく。

8) 『ランジェ侯爵夫人』のモンリヴォー將軍

Mme de Langeais se mit à valser avec une sorte de fureur et d'emportement que redoubla le regard pesant de Montriveau. Il resta debout, en avant de ceux qui s'amusaient à voir les valseurs. Chaque fois que sa maîtresse passait devant lui, ses yeux plongeaient sur cette tête tournoyante, comme ceux d'un tigre sûr de sa proie.

ランジェ夫人はなんとなく逆上と興奮に駆られてワルツを踊り始めたが、モンリヴォーののしかかるような視線のためにこの気持ちは一層あおられていった。彼はワルツの踊り手たちを見て楽しんでいる人たちの前に出て、つつ立っていたきりだった。そして恋人が前を通り過ぎるたびに彼は獲物を狙うトラのような目をして、旋回する女の顔を見据えていた⁽²⁸⁾。

ある日モンリヴォー將軍は社交界の華形ランジェ侯爵夫人に、自分のものに

なぜドラクロワとバルザックは動物に関心を示したのか

なってほしいと告白するが、冷たくあしらわれてしまう。モンリヴォーはこれに復讐を誓い、ワルツを踊るランジェ夫人を見つめた後、数人の男と縛り上げ誘拐し、額に十字架の焼きごてを押そうとするに至る。この場合もまた理性を失った行動に出てしまう人物をトラに例えている。ランジェ夫人のほうは彼を「いじらしいライオン」だと思って油断していたためこの行為の予兆に気付くことが出来なかった。ここにも認識のずれが動物のずれとしてあらわされており、読者だけに提示される。

以上みてきたように、トラにたとえられるのは、男女の区別なく、残忍性が際立つ人物ばかりである。ライオンとは違い、トラに例えられる人物は狙った相手を死に至らしめる。バルザックが「人間喜劇 総序」でビュフォンの博物誌に触れているが、その博物誌にも、ライオンは空腹のために狩りをするので残酷ではないが、トラは、喜びのため、怒りの飢えを満たすために殺す、という記述がある⁽²⁹⁾。トラは、その外見の特徴よりも残忍性が取り上げられ死に向かう物語展開の予兆として用いられる。

5. まとめ

以上の分析と展開から、ロマン主義画家ドラクロワとロマン主義作家バルザックは、1830年、同時期に félin という同じテーマを一方は絵画で、一方は小説で扱ったが、félin の描写においてきわめて写実的であり、その時代では、いかに異国の動物が身近な存在になったかがわかった。両者ともに情熱的に動物を研究したことも明らかになった。この時ドラクロワとバルザックが互いの作品を見たかどうかは定かではないが、両者が初めて出会ったのは1829年冬の社交界であり、以降も交流があった。ドラクロワはバルザック1832年の『ルイ・ランベール』 *Louis Lambert*⁽³⁰⁾ についての賛辞を長い手紙にしたためてバルザックに送っており、バルザックも1834年には『金色の眼の娘』 *La fille aux yeux d'or* の献辞を「画家ウージェヌ・ドラクロワへ」としていて、たがいに強い関心を抱き、大なり小なりの影響関係にあったことをうかがわせる⁽³¹⁾。1830年の砂漠における félin のテーマは、18世紀後半から受け継がれた動物園の発展や、分類に徹する博物学、コード化する観相学などの動物への関心の高まりを受けて

生まれたものである。と同時に遠い異国や未知のものに対する憧れが、歴史的に現実でぐっと身近なものになり始めた高揚感も十分感じられる。両者とも、競うかのように死ぬまで動物と人間のアナロジーに着目し、動物を描き続けた。バルザックは、動物比喩というかたちで効果的に物語に使った。「人間喜劇」において、作品ごとに動物の比喩を数えていくと、最晩年の『従妹ベット』 *La Cousine Bette* (1846)⁽³²⁾ や『従妹ポンス』 *Le Cousin Pons* (1847) にまで大量に使われていることがわかるが、その原型は1830年の『砂漠の情熱』まで遡れるのである。生身の動物、雌ヒョウを一登場人物として登場させ、人間の兵士と対峙させている。動物と人間の差異を鮮やかに描き出しながら félin の行動や習性、そして外見的特徴から人間の女性とのアナロジーも浮上させ、さらには精神的なアナロジーをも描き出している。物語に動物を利用することへの模索とも思える作品なのである。しかし以降は、本物の動物が物語の重要な役を与えられることはなく、動物比喩として多用される。félin は勇敢さ、誇り高さ、冷酷さ、怒り、など内面的な精神性をあらわすために用いられるものが多い。そして、読者はたびたび出てくる動物比喩に無意識的に導かれ、知らず知らずに物語の展開を予見するようになる。それゆえ物語が進むにつれて読者はその展開を必然と感じるようになる。これがバルザックの動物比喩の特徴的一例といえる。1830年『砂漠の情熱』の félin からバルザックの「人間喜劇」を追ってみると、以上のようにまとめられる。画家として félin を描き続けたドラクロワも1830年『砂漠に横たわるトラ』のような単体での描写から、馬やウサギを襲う félin の様子を描くようになっていき、人間社会とも共通する弱肉強食の世界を描くようになっていったのである。バルザックが動物を一度通すことで新たな人間像を提示しようとしたのに対し、ドラクロワは人間が失った、あるいは到達できないダイナミズムを動物で提示しようとしたとも言えるのではないだろうか。

註

- (1) Eugène Delacroix, *Tigre couché dans le désert*, 1830, Eau-forte, roulette et pointe sèche, 32.6×46.5 cm, Paris, Bibliothèque nationale de France, département des

- Estampes et de la photographie.
- (2) Honoré de Balzac, *La passion dans le désert*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1976-1981, vol.6.
 - (3) G. Dargenty, *Eugène Delacroix par lui-même*, Paris, J. Rouam éditeur, 1885, pp.33-34.
 - (4) Eugène Delacroix à Barye, *Correspondance générale*, tome1, p.225.
 - (5) Louis Peisse, «M. Dekacroix. Romantisme», *Le National*, 1830, p.324.
 - (6) Hippolyte Taine, conférence sur les étude anatomique de Leonard de Vinci a l'école des Beaux-Arts, *Revue des cours littéraires de la France et de l'étranger*, 27 mars 1865.
 - (7) Eugène Delacroix, lettre à Isidore Geoffroy Saint-Hilaire, 22 août 1841, *Correspondance générale*, tome2, pp.83-84.
 - (8) Eugène Delacroix, *Journal*, jeudi 6 juin 1850, p.241, vendredi 7 mai 1852, p.299, 18 avril 1854, p.412.
 - (9) Eugène Delacroix, *Cheval attaqué par une lionne*, 1842, Huile sur toile, 34×43 cm, Paris, musée du Louvre.
 - (10) Eugène Delacroix, *Lion dévorant un cheval*, 1844, Lithographie, 16.8×23.6 cm, Paris, musée du Louvre.
 - (11) Eugène Delacroix, *Lionne déchirant la poitrine d'un arabe*, 1849, Lithographie en manière de sanguine, 15×27.3 cm sous réserve, Paris, musée Eugène Delacroix.
 - (12) Eugène Delacroix, *Lion dévorant un sanglier*, 1853, Huile sur toile, 46.3×56.5 cm, Paris, musée du Louvre.
 - (13) Eugène Delacroix, *Lion dévorant un lapin*, 1853, Huile sur toile, 46.5×55.5 cm, Paris, musée du Louvre.
 - (14) Honoré de Balzac, *Théorie de la démarche, La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1976-1981, vol.19, pp.210-251.
 - (15) Honoré de Balzac, *Le Père Goriot* édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1976-1981, vol.3.
 - (16) Honoré de Balzac, *La passion dans le désert*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1976-1981, vol.6. p.1223. 以下、バルザック作品の引用はこの版による。
 - (17) *Ibid.*, p.1224.
 - (18) *Ibid.*, p.1225.
 - (19) *Ibid.*, p.1227.

- (20) *Ibid.*, p.1229.
- (21) Honoré de Balzac, *La Fille aux yeux d'or*, vol.5, p.1057.
- (22) Honoré de Balzac, *La Duchesse de Langeais*, vol.5, p.946.
- (23) Honoré de Balzac, *La Cousine Bette*, vol.7, p.119.
- (24) *Ibid.*, p.296.
- (25) Honoré de Balzac, *Le Père Goriot*, vol.3, p.218.
- (26) Honoré de Balzac, *La Cousine Bette*, vol.7, p.386.
- (27) *Ibid.*, p.145.
- (28) Honoré de Balzac, *La Duchesse de Langeais*, vol.5, p.988.
- (29) Buffon, *Histoire naturelle générale et particulière avec la description du cabinet du roi*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 2007, Histoire naturelle des animaux, Histoire naturelle des quadrupèdes, Le lion, p.844. の項の中に tigre 「トラ」との比較がなされている。
- (30) Honoré de Balzac, *Louis Lambert*, vol.11.
- (31) Honoré de Balzac, *La Fille aux yeux d'or*, vol.5, p.1530.
- (32) Honoré de Balzac, *La Cousine Bette*, vol.7

* 本稿は、成城大学仏文会から頂いた補助金により、2016年7月18日～7月30日にパリでジャルダン・デ・プラント動物園、ルーヴル美術館、ドラクロワ美術館、バルザック資料館などを巡った記録をもとにしたものです。ご支援頂きどうもありがとうございました。